

日本書道史

第6講 「平仮名の発生とその表現」

住川 英明 (岐阜女子大学)

第6講 「平仮名の発生とその表現」

【学習到達目標】

- 平安時代中期の女手の発達について、具体的な作品例を挙げて、概括的に説明することができる。
 - 《高野切》の成立とその書としての特質について、具体的に説明することができる。
-

第6講 「平仮名の発生とその表現」

1. 女手の発達

- 「草仮名」が略化されたものが「女手」である。9世紀の後半から発生し、10世紀に入ると広く使われるようになったのではないかと考えられている。
- 非公式の言語表記である仮名文は、男性も使用したが、女性も多く使用したために、このような呼び方になったものと考えられている。

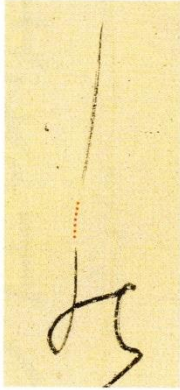
第6講 「平仮名の発生とその表現」

2. 《高野切》の成立と連綿の技法

- 『古今和歌集』のもっとも古い写本が《高野切》である。3人の手になる「寄合書き」であろうと見られ、それぞれ第一種・第二種・第三種に類別される。
- 3人の筆者に共通する書の特質として考えられるのが、「連綿」の技法による流麗典雅な美しさである。連綿とは、いくつかの文字を連続して書く技法で、文字と文字とを連綿線がつないでいることが原則である。

第6講 「平仮名の発生とその表現」

しの^能



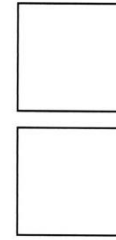
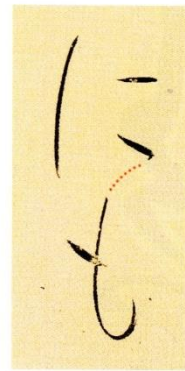
おぎ^能



かく



にも

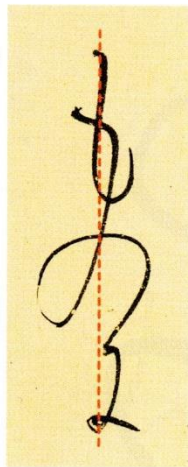


連綿線を用いず、上下の文字の筆脈を意識して書く。

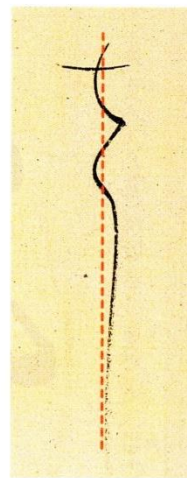
かせ^可



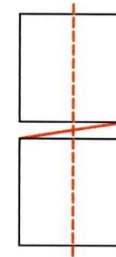
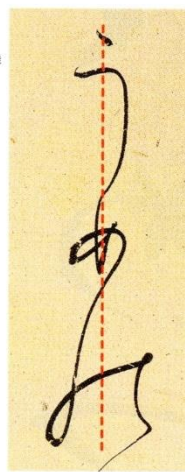
ものに^能



さし



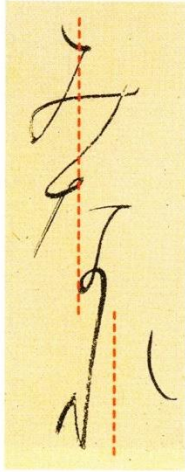
うめの^能



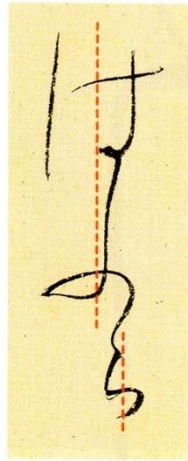
上の文字と下の文字の中心がそろうようにつなげて書く。

第6講 「平仮名の発生とその表現」

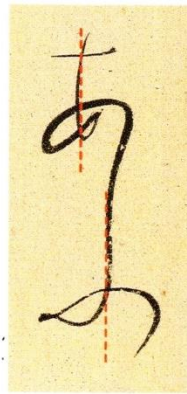
みなれ



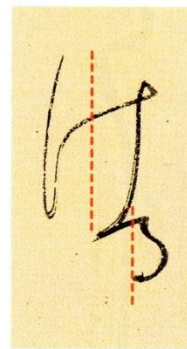
はらら



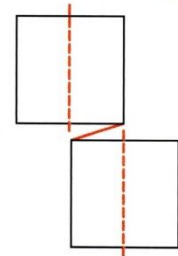
あふ



ける

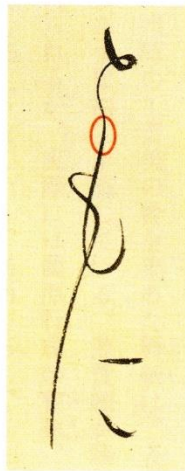


2

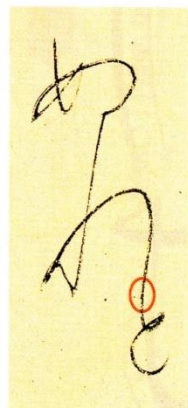


下の文字を右に寄せ、
上の文字からつなげ
て書く。

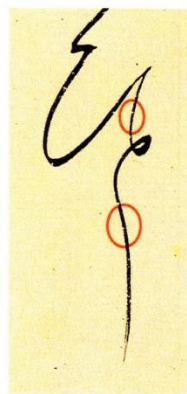
ともじ



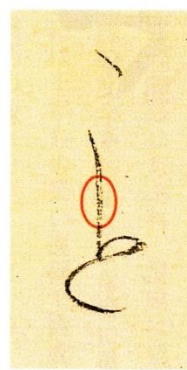
ぬれと



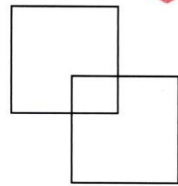
なふ



なふ



3



上の文字の収筆と、
下の文字の起筆を重
ねて書く。

第6講 「平仮名の発生とその表現」

2. 《高野切》の成立と連綿の技法

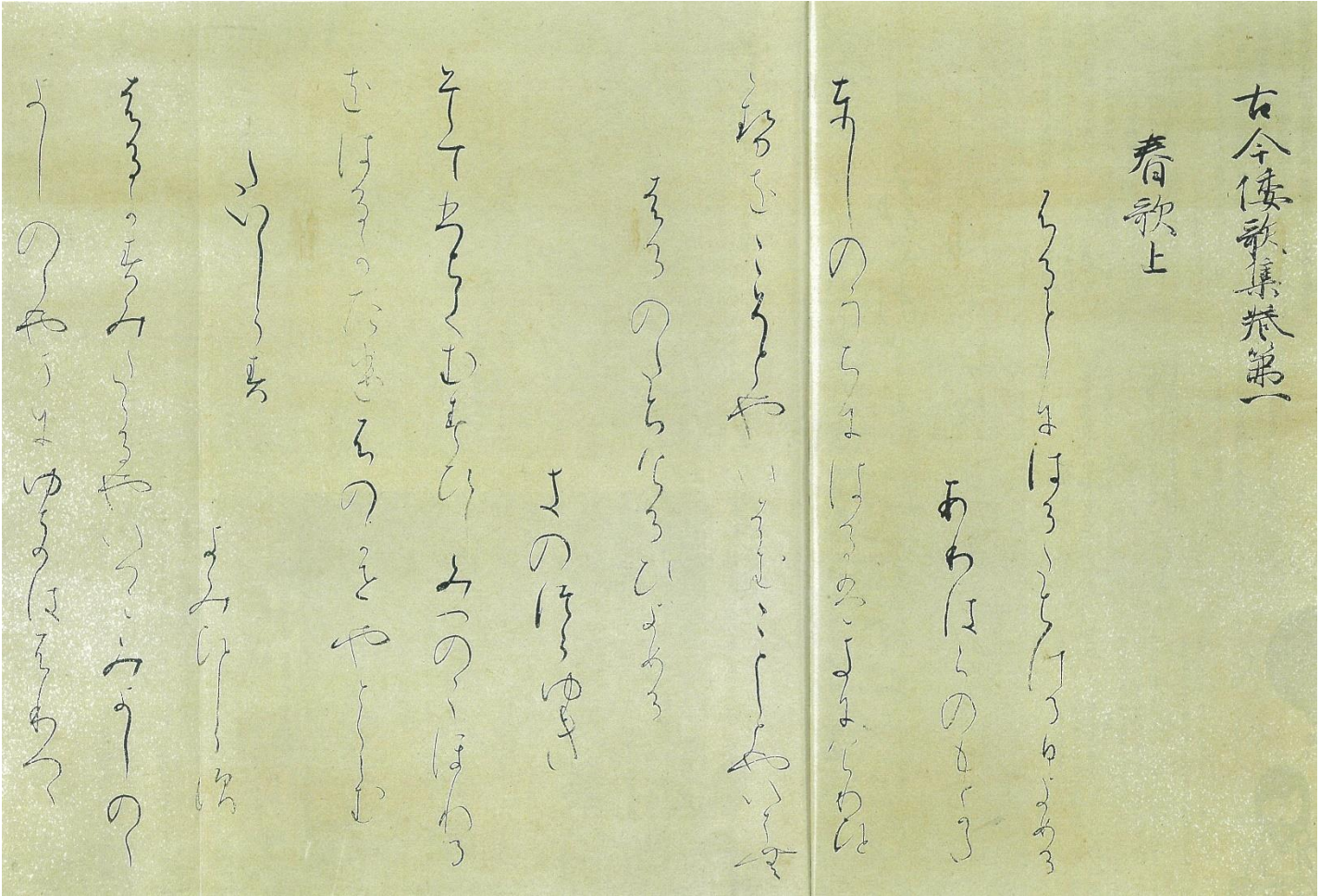
- 第三種は、線質が比較的単純で、のびやか。もっとも若い書き手ではないかと推定されており、書風から見ても、きわめて清新である。
- 第二種は、粘り強い線質と連綿、曲線を活用した巧みな文字造形が見どころ。書者は、《桂本万葉集》などの筆者として知られる源兼行と比定されている。
- 第一種は、用筆や用墨の巧みさ、行間を広く取る、悠揚迫らない典雅な書きぶりが特徴である。自在でありつつ格を外れない、おだやかさと安定感を備えている。

第6講 「平仮名の発生とその表現」

《高野切第一種》

古今倭歌集卷第一

春歌上



課題

1. 《高野切》の成立とその書としての特質について、下記のキーワードを使ってまとめなさい。

「女手」 「連綿」 「古今和歌集」

「寄合書き」

第6講 「平仮名の発生とその表現」

【学習到達目標】

- 平安時代中期の女手の発達について、具体的な作品例を挙げて、概括的に説明することができる。
 - 《高野切》の成立とその書としての特質について、具体的に説明することができる。
-

日本書道史

第6講 「平仮名の発生とその表現」

住川 英明 (岐阜女子大学)